

■秋里籬島 俳諧師。緻密な紹介解説に画家の挿絵溢れる「都名所図会」が大ヒットして、名所図会のジャンルの嚆矢となった。

あきさとりとう

・・・・・・1733＝

京都五条室町の質屋秋里仁左衛門の子に生まれる。名は仁左衛門。

先祖は因幡国秋里城主秋里備前守であり、祖父が元禄年間に上洛し、二条小川で医業を営んでいた。

公事方御定書1742＝9歳：

徳川吉宗没・1751＝18歳：

伯父は貞門系の俳諧師一十軒貞佐で、その関係からか、

大式政治批判1759＝24歳：この少し前までに、貞門系の京都俳人而咲堂練石に入門して、俳諧師として活動を始める。

大岡忠光没・1760＝25歳：警林寺文阿弥亭での而咲堂鞭石の三三回忌に参列。その追福記念集「其やなぎ」(練石編で同年刊)に三句入集、最初の入集らしい。

・・・・・・1762＝27歳：而咲堂の練石編「宝暦十二年歳旦帖」に一句入集。

御蔭参流行・1771＝36歳：

田沼意次老中1772＝37歳：

晩年に著した「秋里家譜」では、醒井五条に住み、建仁寺町五条に別邸を構えていたとも、浄土真宗本願寺派に改宗して妙順寺の信徒となっており、上洛した因幡国の真宗本願寺派光専寺の住職恵雄と親交。

雨月物語刊・1776＝41歳：その序を得て処女作軍書「信長記拾遺」を刊行、続く俳諧作法書「俳諧早作伝」でも文才を示していたが、

・・・・・・1780＝45歳：*京都の書肆吉野家為八から大坂の画工竹原春朝齋の絵をつけた「都名所図会」を刊行。平明な解説に面白い挿絵という斬新な形式で大ヒット、以後繰り返し板を重ねて行く。現代でも有名な齋藤月岑「江戸名所図会」は、月岑の祖父齋藤幸雄が「都名所図会」刊行に刺激を受けたことに始まるのである。

天明大飢饉始1782＝47歳：読本「忠孝人竜伝」を刊行し、

田沼意知刺殺1784＝49歳：練石編「正朔記」に二句入集。

田沼意次失脚1786＝51歳：

寛政改革始・1787＝52歳：「虚空解紐」刊行。門人都月の丹後国河守への帰郷に同行して旅に出る。丹後・但馬・因幡・播磨を巡る。この旅を後に「天橋立紀行」に著したこと、丹後国では、宮津の真照寺住職鷺十の案内で天橋立を訪れ、また「都名所図会」の作者と知己になろうと集った人々と交流。因幡国智頭では京都で親交していた光専寺の住職恵雄を訪れ、そのほか、俳人の八橋・東走・寒瓜・青雍らと交流したことが分かる。「拾遺都名所図会」後、出家して、名を籬島と改める。

・・・・・・1788＝53歳：京都大火によって、前年の天橋立方面への紀行の草稿を焼失。

初の横綱・・1789＝54歳：俳諧の師匠而咲堂練石が死去、追悼文「石々翁傳」の署名に初めて「籬島」と記す。関更編「芭蕉堂奉納集」に一句入集、以後、蕉風復興という面からも、関更が師になる。

異学の禁・・1790＝55歳：翌年にかけての内裏の造営に際し、図方御用に召されていることから、名所図会という体系的な著作に適する設計の才もあつたらしく、内裏の建造物と平安京の制度を解説した「京の水」を著し、

混浴禁止・・1791＝56歳：雙林寺閑阿弥亭での練石の小祥忌、追善之誹譜に参列。而咲堂編練石三回忌追善集「満流鏡」成り、「石々翁傳」を収め、小祥忌追善之俳譜における句のほか、三句入集。刊行している。「大和名所図会」、

ウズマシ来日・1792＝57歳：関更編「花供養」一句入集。

松平定信引退1793＝58歳：「都花月名所」刊行。

写楽・・・・・・1795＝60歳：関更の序文を得て、本業の俳諧作法書「俳翼」、続いて8年前の旅の記録「天橋立紀行」をようやく刊行すると、「東海道名所図会」をつくるための旅に出、帰路の嶋田駅で句作。

プロト航来航・1796＝61歳：大江文披「和漢年中修事秘要」改題の「仙術不老伝」に序文。実用書「絵引節用集」を挟んで「和泉名所図会」、

昌平饗始・・1797＝62歳：「千羽鶴折形」序。芭蕉堂にて開催した句会の集関更編「月の会」に一句入集。慈周、皆川漢園、村瀬栲亭、春蘭州、村上東洲、月峰とともに高台寺に遊ぶ。嶋田駅で句を含む「東海道名所図会」、

古事記伝・・1798＝63歳：「摂津名所図会」と次々刊行して名所図会のジャンルを確立。その後も、

蝦夷地直轄始1799＝64歳：この年、「江戸名所図会」を著していた齋藤幸雄が、「東海道名所図会」が出たことに出版を焦るも果たせず、死去し、子の齋藤幸孝が後を継いで取り組むことになる。「都林泉名勝図会」、

伊能測量始・1800＝65歳：山口素絢の「倭人物画譜」に序文をおくる。菊岡沽涼「諸国里人談」に跋文を書く。来縮編の芭蕉百回忌追善集「菊の香」に一句入集。「絵本朝鮮軍記」、「俳諧早作伝」を改題した「俳諧続翌松」を刊行するなど、本業も怠らず、「源平盛衰記図会」で歴史ものの図会も始め、この頃、「秋里家譜」を著して生涯を総括、

本居宣長没・1801＝66歳：細合斗南から詩を贈られる。伴高蹊の和文の会で、「鳥」を作る。この頃から伴高蹊に師事するようになるなか、「河内名所図会」、歴史もの「保元平治闘図会」、

膝栗毛始・・1802＝67歳：覆刻版「小栗忠孝記」の序文を書く。「絵本年代記」刊行。「木曾路名所図会」の旅に出、

アメリカ船来航始1803＝68歳：「教訓安楽問答」「日本風土記」刊行。「歴史もの「前太平記図会」、

青洲麻酔手術1805＝70歳：「唐土名所談」刊行。明善月桂編の芭蕉百回忌追善集「俳諧維子塚」に序文をおくり、二句入集。*「木曾路名所図会」と、刊行し続ける。その後は、浄土真宗本願寺派信徒としての生涯を全うするように、

ウツ船狼藉・1807＝72歳：

・・・・・・1810＝75歳：

高田屋拿捕・1812＝77歳：木架追善集「ひしのはな」に一句入集し、この年までの存命は確実。まもなく、没したと考えられる。

「江戸名所図会」は50年以上も後によりやく刊行、上方から発した文化が江戸で花開いたといえよう。

下記著書の年譜稿の前書きから、享和2年(1802)に69歳として、1733年生まれと仮定した。

藤川玲満「秋里籬島と近世中後期の上方出版界」、